

## 文化・芸術

「海」

1937年、木版(白摺)・和紙  
88・5センチ×51・5センチ

恩地孝四郎 (1891~1955年)

画面手前でしゃがみ込む日焼けした褐色の肌の女性と、白い布をまとった白い肌の女性の対比が強い印象を与えます。湧き立つような赤褐色の背景に、右上の画面外どこまでもひろがっていきそうな鮮やかな青。夏の熱い空気や活気ある情熱があふれている一点です。

恩地孝四郎は、東京美術学校在学中に詩と版画の雑誌「月映(つぐはえ)」を創刊し、早い時期から抽象作品を発表していました。前橋市出身の詩人、萩原朔太郎とも親交が深く、萩原の詩集「月に吠える」の装丁も手掛けています。

浮世絵など絵師、彫師、摺師(すりし)の3者の共同作業からなる伝統版画とは違い、自ら描き、自ら彫り、自ら摺る、創作版画の振興に尽力した恩地。本作を制作した2年後には、「一木会」という版画研究会を発足させます。この「一木会」に集まり恩地とともに国際展などでも活躍していく斎藤清や駒井哲郎らの版画作品を、現在、大川美術館展示室3でご覧いただけます。(池田)

名画の扉

大川美術館特別展示から

